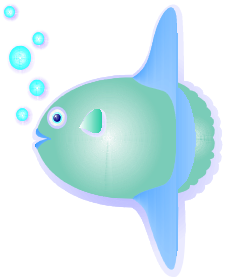
日本バプテスト連盟
性差別問題特別委員会
ニュースレター 第29号、2018．8．20
★日本バプテスト連盟のホームページでも読むことができます。



巻頭言：「悔い改めを生きる 」

吉田　尚志

「イエスはお答えになった。“医者を必要とするのは、健康な人でなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである”」
（ルカによる福音書5 章31-32 節）。

自ら Gay（ゲイ、男性同性愛者）であることを公言（カムアウト）した牧師の平良愛香（たいらあいか）氏は、ご自身の著書の中で、「性的少数者」が社会で疎外されてしまう理由として「宗教的な理由」をその一つとしてあげています。平良氏は、キリスト教をはじめとする多くの宗教が、「男はこうあるべき」「女はこうあるべき」という価値観を人々に強く刷り込み、その価値観によって同性愛が、神の意志や神がつくった秩序に反するとしてその存在自体が罪だとされてきた歴史があると語ります。

当時のイスラエル社会では、宗教的価値観のなかで「律法」を守らない（守れない）人々へ向けられた蔑称が「罪人」でした。しかし、上記のイエスさまの言葉が示すところの「罪人」とはその意味でのものではなく、“神の御心を悟れずして逸脱してゆく人間”を指しての意味として捉えたいと私は考えます。仮にそうであるならば、この時イエスさまが語られた「罪人」とは、徴税人もファリサイ派の律法学者も、この時イエスさまのもとにいた全ての人間を指し示している言葉とも読めるのです。神の前に正しい人は一人もおらず、だからこそイエスさまは、その「罪人」をご自分のもとに招いておられる神に立ち帰らせるために語られたのでした。しかしながら、イエスさまへの応答は徴税人たちとファリサイ派の律法学者たちとでは大きく異なりました。片やイエスさまを迎え入れて盛大な宴会を催し、片や自らの持つ宗教的価値観に固執するなか「罪人」と一緒に食事をすることは許されないとしてイエスさまを批判したのです。教会は、悔い改めへと招くイエスさまの言葉を受け入れ、神に招かれた「罪人」として如何に生きてゆくかが問われていると思います。その一つとして、自らの持つ宗教的価値観によって、社会やあるいは教会の中においても「性的少数者」への差別を助長させてきてしまった歴史事実を真摯に顧み受け止めることが求められているのではないでしょうか？そのうえで教会が、差別や偏見のない世界をつくる一翼を担う存在となってゆけるようにと願います。

（よしだ　なおし/当委員会協力委員　室蘭バプテスト・キリスト教会）

「With　You 」は、いかが？

今井　朋恵

ルカ10章の善いサマリア人の話しの中に、「その人を見ると、道の向こう側を通って行った」というフレーズがあります。それは面倒なことに関わりたくないという意思の表れであり、傷ついた人々が放置されてきた苦い経験を想起します。

私たちの周りには、人と異なる意見を持つことや行動は、よろしくないという空気が満ちています。自治会で募金を集める際、「他の方は、どれくらい？」と問われ、日常の中で慎重に無難であろうとすることを思わされます。学校生活、仕事、人間関係など、何事に於いても忍耐力があること我慢強いことが美徳とされます。注射で泣かなかった子は、「よく頑張った」と褒められます。その人が持つ価値観は、自分を鼓舞し規定するだけでなく、他者に同じことを求めて押し付ける可能性があることを覚えておきたいものです。

抑圧と沈黙を経て、海外で始まった#Me　Too 運動によって、今まで明らかにされていなかったことが公の場で開かれていきました。「私も」と、声を上げる人たちが続いていったのです。セクハラやパワハラ、性暴力被害を受けた人が立ち上がり語りはじめたのです。日本でも、#Me　Too 運動は話題になり声は上がりかけたように思えましたが、海外のようなうねりには繋がりません。

ある学生が、インタビューで自分が受けたことを語れない理由の一つとして、「自分を否定せずに、話しをきいてくれる人を探すのが難しい」と答えていました。「あなたの言っていることは、にわかに信じ難い」、「それは嘘でしょう」と私も複数の方に言われてきました。こちらが話そうとしても、嘘の話しとして受け取られるのです。結局、痛みや叫びを打ち明けられるのは、安全な場や安全な人に限られるのです。そして、受容の環境がなければ、#Me　Too と言うことには、危険が伴うのです。自身のセクシュアリティを語るドキドキも危険性も同様です。言うまでもなく、公の場で語ることは他者の期待や強制によらず、公言しない選びもあり、どちらが勝っているということでもありません。

最近、性差別を考えることは大事という声を聞きます。うれしいことです。しかしながら、「あなたと一緒に」は、限りなく難しいのが現実です。With　You は、パートナー関係にある人が、行えばいいのでは？という考えもあるでしょう。しかし、家族や夫婦の単位で困りごとを解決するということならば、政府が進める自己責任論と何ら変わりはないのです。一人の人が、ひとりのままで誰かと連帯していける、安全な教会や社会を願うのです。

男性優位、異性愛強制主義、多数派優位、経済至上主義の社会の中で、常にてっぺんを取りたいのは？個々の人権は保障されているはずなのに、誰かを支配し、服従させたいという誘惑は、今も存在しています。虐待を受け亡くなった女の子が書き残した「もうおねがいゆるして」、「もうぜったいぜったいやらないからね」というメモの言葉が、心に残っています。力を持っている人、偉い人の言うことを聞かないと、「おしおき」が継続するのです。誤った力の行使、事柄や意識の根底にある性差別を私たち自身が、一体いつ諦めるのか問われています。傷を負ったままの人に向けて、 With　You の声が、動きがあちらこちらに存在する、誰もが生きやすい世界の実現を望みます。

（いまい　ともえ/当委員会委員　今治バプテスト教会）

「家族主義を越えて 」

中條　譲治

自民党の衆議院議員、杉田水脈（みお）氏が、「新潮」2018 年 8 月号に、「LGBTのために税金を使うことに賛同が得られるものでしょうか。彼ら彼女らは子どもを作らない、つまり生産性がないのです。」と寄稿し、国内外から批判が殺到しています。この杉田氏の発言には、いくつもの問題があります。子どもができない女性・夫婦が抱える痛みへの無理解、また、人の価値を「生産性」という物差しが測る一面性、そもそも、その「生産性」の定義の曖昧さ、多くの批判が殺到するのも当然でありましょう。しかし、この発言について、自民党の幹部は、あやふやな態度を取り続けています。以前でしたら、所属議員の問題発言があれば、すぐに党の幹部は遺憾の意を表わし、火消しに回ったものですが、今回、自民党二階幹事長は、「いろんな人生観もある。」と言って、この発言を容認する態度を示しています。出産がテーマとなる保守的（右傾的）発言を、男性議員ではなく女性議員に言わせることによって、少しでも世論を操作しようという魂胆もあるのでしょうか。

自民党の本音は、小泉政権下に作成された『 2005 年憲法草案』のための『論点整理』(2004 年）に明確に語られています。「婚姻・家族における両性の平等の規定(24 条）は、家族や共同体の価値を重視する観点から見直すべきである。」と。この本音は、『 2005 年草案』では全く表に出ませんでしたが、民主党政権下、自民党が野党の時に作成された『 2012 年憲法草案』では、形となって出て来ました。『 2012 年草案』では、 24 条の 1 として新たな文言が加えられました。「家族は、社会の自然かつ基礎的な単位として、尊重される。家族は互いに助け合わなければならない。」と。 24 条は、本来、婚姻における両性の平等、個々人の尊重を語っているものですが、それに先立つこととして、「家族」という価値を押し込んで来たのです。この家族主義が目指すところは、家父長制の復活、天皇を頂点とする大家族としての日本という国体の再興なのです。同時に、社会保障費が膨張する中で、福祉を国の政策ではなく、家族に自己責任として負わせる意図も見え隠れします。

確かに、家族とは何か？どのような共同体を作っていくのか？私たちは、問われ続けています。しかし、安易な家族主義には陥らないように気を付けたいと思います。教会でも、教勢が停滞し、焦りを感じる中で、「信仰の継承」や「クリスチャンホームの形成」ということが、力説されます。次第に、個々人ではなく家族単位で、信仰生活のあり方を評価する流れが生まれます。そして、特に牧師の家族は、その家族主義に呑まれ、右往左往し、傷つくことが少なくありません。牧師の連れ合い（いわゆる「牧師夫人」）、また牧師の子どもゆえに、過剰な期待をかけられ、その重圧に苦しむのです。教会は、自己保存のために「生産性」を追及する集まりではありません。一人一人が神から与えられたいのちを喜び、受けとめ、仕え合いながら歩む共同体に他なりません。昨今声高に語られる家族主義を越えて、教会は、人と人とが真の関係性を築いていく恵みの場所であり続けたいと願います。

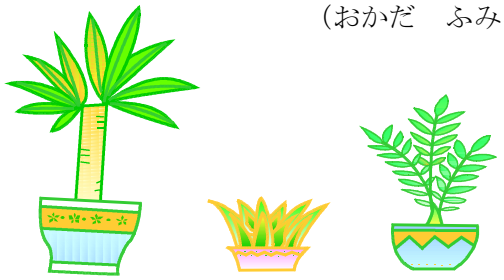
（ちゅうじょう　じょうじ／当委員会委員　長住バプテスト教会）

「弟の夫 」　田亀源五郎作

岡田　富美子

「教会図書に寄贈しまーす」と書棚に並べられた「弟の夫」全 4 巻。プレミアムドラマにもなり、第 19 回メディア芸術祭マンガ部門　優秀賞受賞。「弟の夫」？本を手にし、ページをくる。弥一と夏菜、親子のところへ、カナダからマイクという弟の夫がやって来る。弥一にはカナダに双子の弟涼二がいた。今は亡き涼二のパートナーであるマイクが兄に会いに来日した。マイクはどんな気持ちで海を渡ったのだろう。三人の生活が始まる。マイクの涼二への信頼、愛が新しい関係を開いていく。小学生の夏菜はマイクが大好きになり、友だちに紹介したがる。しかし、「同性愛者が子どもに悪影響を与える」と考える大人は、マイクに子どもたちを近づけさせまいとする。私たちの中に巣食う偏見、思い込みがそうさせるのだ。マイクというひとりの尊厳をもつ人間を知ろうともしないで壁をつくってしまう。そこには入れない。学校の先生が自粛を要請する。その時、弥一は「あの子（夏菜）が友だちに大好きな叔父の話をするのを止める理由は私には何もありません」と。弥一がここまで言えるほどにマイクとの生活が弥一をかえた。人に自分のことを打明けられず悩んでいる少年が訪ねてくる。マイクと会い「やっとわかってもらえた関係」で自身を受容する。社会が偏見で満ちていたら、たちまち自分自身が見えなくなりアイデンティティを失ってしまう。誌面の中にゲイ・カルチャー講座のコーナーがある。「ゲイ・プライドとは、社会から『恥ずべきもの』『罪』といった烙印を押されてきた同性愛者がそれに対して『自己肯定しよう』『自尊心を失うな』というのがそれです」。「一番大切なのは、本人の気持ち。本人が望むことなら、ただ見守り、幸せならば祝福する。そんな単純なことだったのに・・」生きていた時には涼二を丸ごと理解できなかった弥一が自分自身も他者も受容する姿へとかえられていく。わたしもともにかえられていきたい。

（おかだ　ふみこ/当委員会委員長　那覇新都心キリスト教会）



編集後記：今年の夏は、まだ終わらない。酷暑の中、日常生活にさえ困難を覚える日々。暑さで、思考停止に陥ってしまいそう。男子の合格を優先し、大学受験の成績に数式を用いて、少し女子を締め出してみた？！いのちを救う重要な医療現場のかげで見過ごされる、人間の生。「女性の活躍」を声高に唱える主体は男性？許可と承認を得て、輝ける女性たち？いのちの大切さを豪雨や台風被害を思い再確認。いのちに選別はない。今もなお闘い続ける沖縄、敗戦記念を迎える夏、私たちもそれぞれの場で、いのちに向かい合い平和を作りだすものになれたらと願う。〈 T 〉